

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**  
**大学院生研究**  
**2005 年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院			文学 研究科	地理学 専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏 名		
	文学研究科・教授		豊田 由貴夫 印		
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ 人文		<b>個人・共同の別</b>	個人 ・ 共同 名	
<b>研究課題名</b>	バリ島における観光と葬送儀礼—「伝統的」慣習としてのケガレ観の変容と現状				
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科・地理学専攻・博士後期課程3年次		山本 早良紗 印		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
<b>研究期間</b>	2005 年度				
<b>研究経費</b>	200 千円				

**研究の概要** (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、バリ島を研究対象地域とし、当該地域において最もグローバル化の動態が顕著に見られる観光化の潮流が、島民の基本的な生活枠組みである慣習村（バリ・ヒンドゥー教を中心とした「伝統的」慣習の紐帯に基づく村組織）社会における、人々の実践としての葬送儀礼に与える諸影響に注目している。その上で、そうした観光化の動きが葬送儀礼にもたらした諸影響によって、村落社会内でこれまで脈々と受け継がれてきた「伝統的」慣習としての穢れ観、なかでも死に関する穢れ観念にどのような変化をもたらしたのか、そしてそれは現在どのような形で存在しているのかについて明らかにすることを試みた。当該地域におけるこれまでの観光化の歴史を、文献やオーラルヒストリーの調査を通して通時的に検証するとともに、現在の葬送儀礼という実践の在り方を詳細に調査することで、歴史的かつ同時代的視点から、穢れ観念という「伝統的」慣習を現代社会に即して捉えなおすことが本研究の目的である。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 観光 ] [ 葬送儀礼 ] [ 穢れ観念 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、バリ島における観光化の潮流が、地域社会である慣習村での葬送儀礼、そして人々が実践している「伝統的」慣習としての穢れ観念に及ぼす影響を与えているのかについての問題を、多角的に浮き彫りとさせることを目的とした。

本研究の活動は、現地バリ島におけるフィールドワークを中心とし、その活動の主眼は以下の5点に絞られた。①慣習村での村落調査(村民への聞き取りおよび参与観察)、②宗教関係者への聞き取り調査、③観光業関係者への聞き取り調査、④行政機関での聞き取り調査、⑤資料・文献の収集、である。とりわけ、村落調査では、バリ島中部に位置するギャニャール県ウブド郡のうち、観光化の進捗によって選定した3つの慣習村を調査の対象とし、①当該地域における観光化の歴史的背景、②葬送儀礼および穢れ観念の現状、③村の慣習について定めた慣習法典や規約の分析、を着眼点として研究活動を行った。

バリ島は、島民の9割近くがヒンドゥー教徒で、彼らの生活基盤は、古くからその地域に伝わる慣習(アダット)を共有し、バリ・ヒンドゥー教の宗教的紐帯にもとづく村組織である慣習村(デサ・アダット)にある。また、バリ・ヒンドゥー教では、階級制カスタが採用されており、ブラーフマナ・サトリア・ウェイシャの上位三階層が貴族層で、12世紀に東ジャワで栄えたマジャパイト王国の末裔という説が有力である。マジャパイト王国は13世紀にイスラム勢力の侵攻を受けて滅びるが、その際に残ったヒンドゥー教徒が現在のバリ島に逃げてきて、ここにヒンドゥー教が根付いたとも言われている。他方、下位階層スードラは平民層で、上述したマジャパイトの進入以前から現在のバリ島に居住していた人々だと考えられている。

各慣習村には必ず、その土地の慣習をまとめ成文化した慣習法典(アウィグ・アウィグ)が存在する。慣習は、13世紀にヒンドゥー教がバリ島にもたらされる以前から受け継がれてきていたものであるが、植民地時代にオランダの手により法として整理された段階でヒンドゥー教と結びつき、現在ではインドネシアにおけるヒンドゥー教の最高機関であるインドネシア・ヒンドゥー教評議会(パリスダ・ヒンドゥー・ダルマ・インドネシア)の監修のもと、サンスクリット語および古バリ語であるカウィ語を含むバリ語(なかでも最も敬意の高いアルースと呼ばれる語体)で記述、成文化されている。つまり、本来はヒンドゥー教とは関係のなかった慣習が、現在ではヒンドゥー教の核心的な要素となっているといえる。一方、国家宗教に色濃く裏付けられた慣習法とは別に、各村での様々な状況や問題に応じて設定される、祭礼や儀礼に関する規約あるいは覚書でプララムというものがある。これは文章化されているものも一部あるが、ほとんどは各祭礼・儀礼の際に一時的に取り決め、随時変化していくものであるため、口承で認識されている。前者の慣習法からは、国や州政府が観光政策の一環として推し進める文化イメージの創出の内実が浮き彫りとなり、他方プララムや、さらにそこにも描かれていないような細かな日常的ルールなどからは、「上から」の政策を受けつつも、自分たちの生活の中心基盤である慣習を守るべく、身近な状況や問題点を考慮しながら文化的実践を行う慣習村の村民たちの生活世界が明らかとなった。この両者の関係性は、決して一方通行的なものではなく、国や州政府が提示する様々な文化政策を、慣習村の住民たちは自らの生活に上手く流用するとともに、彼らの側からも積極的に時代に即した「新しい」文化の創造を手掛けているといえるのではないだろうか。

本研究で調査対象とした3つの慣習村が位置するウブドエリアは、現在バリ島内でも有名な観光地の一つで、外国人観光客の人気を博している。ウブドの観光化は1920年代にさかのぼる。オランダ体制下、この地域で権力を握り、ウブド王家を司っていたスカワティ族のチョコルド・ラコー・スカワティと、彼の弟であるチョコルド・アグン・スカワティの兄弟が、ウブド観光の発端を担った。ラコーは、1925年にバリ島を訪れたドイツ人の芸術家ヴァルター・シュピースを最初にもてなした人物だといえる。シュピースはその後ウブドに定住し、絵画・演劇・舞踊などで数々の新作芸術を生み出す。彼が、今日多くの人々に「バリ島芸術」として知られているものの基盤を固めたといっても過言ではない。このラコーとシュピースの出会いや、また弟アグンとバリ定住外国人サークルとの交流が、ウブドをバリの文化的中心とするイメージの創出の契機となったと考えられ、その後1980年代後半から急速化するインドネシア国家主導の観光開発の際の、ウブドの観光戦略の確立にも大きな役割を果たした。

こうした背景を受けて、本研究の研究対象地域であるウブドは現在、バリ島の絵画・芸能・儀礼と

**研究成果の概要 つづき**

いった文化・宗教的要素を観光の第一の商品としている。そのため、地元の旅行代理店やツーリストインフォメーションでは、連日舞踊や儀礼のスケジュールが告知され、そのツアーが組まれている。なかでも、火葬儀礼の見物ツアーは人気が高く、それを求めて多くの外国人観光客がウブドに集まるのだという。本研究で選定した3つの慣習村は、ひとつはウブドエリアのほぼ中心部に位置し、バリ芸能の中心地ともいわれ、観光化が著しく進展している A 村、二つ目に中心部からは2キロほど離れた丘陵部に位置し、A 村ほどではないがある程度観光化が浸透している B 村、三つ目に中心部からは10キロ近く離れた山間部に位置し、観光客がほとんど訪れることがない C 村、である。A 村には、貴族層、平民層ともに4つのカスタの者が混在しているが、B 村は村員の全てが平民層スードラで、他方の C 村は村人の9割が貴族層で残りの1割が平民層という構成になっている。こうした背景をもつ3村で、葬送儀礼の実態を調査し、死の穢れ観の認識について聞き取り調査を行い、得られたデータを比較検討することで、観光化と「伝統的」慣習の関係性を分析した。

まず、葬送儀礼も穢れ観に関しても、いずれも慣習法のレベルでは村間の相違はほとんど見られなかった。これは慣習法を司っている最高機関がヒンドゥー評議会であるため、バリ島内である程度一貫した見解がとられていることによる。だが、一点挙げられる違いとして、B 村のみが葬送儀礼を、3年に一度実施される集落の合同火葬という形でしか認めていないことがある。この規則は、5年ほど前に、村内の平等性を維持するために設けられたという。観光化が進展することで各家の経済的な格差が生まれ、それにより葬送儀礼の内容や規模が不均衡となったため、村員間の関係性に影響を及ぼすと考えられこうした規則が義務付けられたようである。B 村は、A・C 村と異なり、平民層のみで構成されそもそも階級差がないため、こうした措置をとる必要性が生じ、またとり易かったともいえよう。A 村は階級は様々だが、観光化が著しく進展している今日では、カスタの違いよりはむしろ、職業や経済力による社会的地位が重視されて、それに応じた葬儀を行うのが適切と考えられている。低カスタの家でも裕福であれば、一度土葬をしてから火葬を行う合同火葬を採用せず、土葬をしない直接火葬を行う(合同火葬は死後何年か土葬をしておくので、その間に火葬の資金を貯蓄できる上に、何世帯か合同で行い、かつ村が実施主体となるので、かかる費用が少なくなる)し、また逆のケースもある。近代的な価値観が一般化していることが見てとれよう。他方、観光化がほとんど進んでいない C 村では、A 村とは対称的に、経済力の大小に関わらず、カスタの高低が最も重視されて、高カスタの家はどんなに貧しくとも合同火葬に参加するという例は見当たらなかった。

従来は、一度土葬を行いのちに火葬を行うという、今日の合同火葬に当たる葬儀形態が一般的であったといわれている。それは、死者の遺体に付された穢れを、土葬により遺体を腐敗・消滅させることで取り除くことを意味していた。だが、バリ島全体で観光化が進み、近代化されることで、そうした遺体に関する穢れ観念が衰退し、土葬を行うのは火葬資金を貯めるためという意味付けに変化したものと考えられる。

また、合同火葬を義務付けた B 村は除き、とりわけ観光化が著しい A 村のような村では、カスタによる葬儀形態の相違という本来の要素が変化し、財力のある家は自らの社会的地位や名誉を誇示するために、より大規模で華やかな火葬を行うことが美德とされ、そのことが亡くなった死者に対する敬意の表象であるとも考えられている。また、ウブドの観光名物である火葬を派手に行うことは、より多くの観光客の獲得につながるとして、A 村では積極的にそれを推進しているという。つまり、観光化によって、一連の葬送儀礼のなかでもツアーの対象となっている火葬のみが消費され、本来の、死者の霊魂を浄化させるための神聖な宗教儀礼という要素よりも、「見せ物」としての側面がより顕在化したといえる。ここでもまた、火葬を行う以前の死者の魂は穢れたものであるために、火という浄化の装置を用いて清めなければならないという従来のものである穢れ観の本質が、観光化の進展により変化しているといえるだろう。

以上のように、観光化の諸影響は葬送儀礼の形態に変化をもたらし、その結果「伝統的」慣習である穢れ観も変容していることが明らかとなった。国家機関であるヒンドゥー評議会が中心となって文化・観光政策を推進する一方で、慣習村の住民らも敏感にそうした時代性を受け、積極的に「新たな」文化創造をしているということがいえるのではないだろうか。